

食糧危機と

“山菜採り休日”

終戦直後は、生徒の服装もいろいろだった。

戦闘帽あり、学生帽あり、予科練服あり、国民服あり、何でもある物を使う時代だった。ただ、学生帽への憧れがあったのか、消防団の制帽を帽子屋に持っていて学生帽に改造するのが流行ったりした。上着のホックやボタンを外していると先生や上級生に厳しく注意された。先生よりも、むしろ上級生のほうが怖かった。

教師たちも、国民服に乗馬ズボンなどという服装も珍しくはなかった。数学の千田助治教師はそのスタイルにリュックサックを背負って通勤した。リュックのなかには命の次に大切な外国語の数学の原書が入っていたという。その本

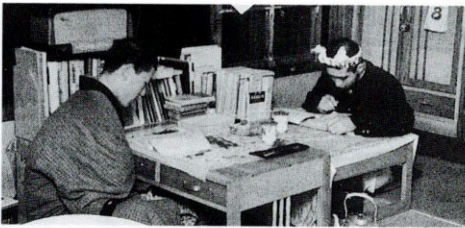
は、後に図書館の千田文庫のなかに収められた。物不足とともに、戦後の食糧危機は深刻だった。

昭和二年の五月に米の配給がとまり、代わりに砂糖・大豆・大豆カス・魚・トウモロコシ粉・干ブドウ・干アンズなどが、ほんの少しづつ配給された。市民の食生活は底をつき、人々は食糧の買い出しに奔走した。古間木方面へジャガイモを求めにいたり、奥中山や山田線の区界・浅岸方面へ山菜採りに出掛けたりした。教職員も生活苦の渦中にあり、郡部に適当なつてを持たない教員なら、生徒から買い出し先の情報を得たい衝動にかられるも当然だったかもしれない。事情は生徒も同じだった。

このような食糧危機に対処するため、本校では“山菜採り休日”なるものを設けた。これは他の学校でも実施されたが、数日間を臨時休業とし、生徒にワラビ、ゼンマイ、フキなどの山

菜を採る機会をあたえて、家庭の食糧確保にくらかも役立たせようというものだった。

昭和二年度は五月二十七日から三〇日までの四日間、二年度は五月二十九日から三一日までの三日間、また三年度は五月二八、二十九日の二日間がそれぞれこの“山菜採り休日”だった。



寄宿舎で只今勉強中(昭和31年)



寄宿舎での入浴シーン(昭和31年)